読者の声

渡世賞について

新聞でみました。
文学賞の佳作を増やしてやって下さるようおねがいします。
私は、平凡な一主婦ですがその心意気に打たれました。ほんとうに少くて恐縮ですが一カンパします。御用のためお使い下さればうれしいです。二〇〇〇円同封。

北海道　主婦

☆　☆

冠省。ありがとうございました。
読ませていただいております。渡世賞の全部に生活のにほいが、和牛のからだからでる汗のように出ていて、そしてまた、プラス的生き方にこころ動かされます。

大分、加西市

☆　☆

19号には文学賞の発表があったが、応募総数、応募作品の内訳及び詩作品の受賞者がいなかった理由などが書かれていなかったのが残念だと思った。

京都

☆　☆

生れて初めて私の文章がこうして印刷物となるとは何とも言い現わせぬ気持です。
胸から胸まで読みましたのさ、生意気ですが感想をのべさせて頂きます。短歌、俳句、詩がもう少し多いだろうと思って居ましたが、意外と少ないですね。それと少しユーモアに欠けている様に思います。次回には川柳も取入れられたらいかがでしょう。

井上市五郎、四七才

☆　☆

昨日お心にかけられまして「労務者渡世」の第十号見ると思送下さいまして有難うございました厚くお礼申し上げます。
先日の単行本と共に正月の休日をゆっくり読ましていただきます。

愚作ですが
いくつしみ　はげましあい
て我ら達　寒さに負けず
煩悩りゆがん　芦田俊夫

☆　☆

財務者液世十九号お送り頂き有難うございました。

入選俳句、短歌、心をつき刺すような言葉に　紫偶しながら、実感を重く受けました。

小説部門の作品も生活感のある文章は大いに勉強になりました。一層精進したいと気がつきました。いつかそちらへ行けましたら寄らして頂きたいとも思い。文学を通じておつき合いの出来る喜びを感じました。

子供の頃から貧しいというよりも、ごみの中からパンくずを拾って喰って生活をしましたが、文学に縋って生きる甲斐も見つけました。

杉嶋二、大津市

☆　☆

液世19号拝見させていただきました。文学賞の当選作が発表されているということで小生も到る所の騒ぎを抑えつつ、一気に読了しました。

朝日、毎日をはじめ、マスコミではかなり騒がれ、小生の地元より発行されている地方新聞にまで「労務者の文学賞」として紹介されました。全国津々浦々にまで草創期のニュースは伝れり、これで賞そのものが今後、対要しく基盤が出来上ったといっても過言ではありますまい。

さて今回の当選作について感後感も少しく述べさしていただくと、全般的に金の生活に密着していて、誘まれた方の中にも、身につまされたといった感を抱いた人は多いと思います。

情しむらくは小説「ケッチン」の場合、「おれ」がどうも類型的な気がするのです。そのため読みきた作品世界の只中にのめり込ませる迫力にやや欠けるきらいがあるのではないでしょうか。ひと動詞をとっ払ったり慶語をふんだんに使用したりで文章にリズムがあり、技巧的には面白いという印象を受けました。

開道訂、二三キ

☆　☆

「ケッチン」。この作品を通出された編集者に敬意を表します。

ある意味で感動を覚えました。文章に独特のリズムがあり、それはそのまま、作者の精神のリズム、精神の自由さ、に由来していると思いました。

聞き慣れないイン語が新鮮さこの作品に使用された他にもイン語があるのなら、全部イン語で埋めつくしたらもっと面白かったでしょう。

この作品の面白さは、ひとり作者のみの功績ではないことは自明です。つまり、この作品の舞台である、造船所の現場に働く労働者のもつひとり〳〵の男臭い考え方、生き方の面白さに半ばは工夫っていると思います。それを巧みに捉えた作者の努力と力量はこの作品によっても充分読ませているのですから、工に近ぢたような意味でもっと幅広く、それら舞台になった造船所で働く労働者のひとりひとりの生きざまを克明に、しつこく描き出していただきたいと思うのです。

きびしい、それでも、明日の飯の心配までしなければならないのですから、文章を練るとしったハンカくさいことをやっているユトリもないのが現状だろうと察しますが、だからこそ、ケッチンのみたいな作品を書き上げることのできる人は、そうした人々の生きざまを表現してほしいと思います。

それが実現された時、この作品は、はるかに普遍的に価値ある労働者の実態と日本の労働者の、ひいては経済の底辺をあざやかに照し出す歴史的価値（ちょっとキザな言葉ですが）をかち得ることができるのではないか……。

歌野、（東京）

☆　☆

「おれ」もおもしろく拝読しました。小生も一度、ぜひ半生記と題して発表したいと思います。

行倒れ死人のアンコの末路を、そしてその死体の行方は。死んで金にならない死体をものようにあつかっているの不条理を発表されたい。

新宿や　公園に咲く人のたね
今年こそアンコやめたい
山下幸夫、四大オ

☆　☆

（新）行路死亡人は本年中に特集を行なう予定です。

☆　☆

労務者夜世始めてみた。なかなかおもしろい。

正月過ぎに神戸の南面放送ラジオのアナが、〈死ぬこともう、……俺千足袋をはく。日産の、……来ては遠のく〉の二句をよんだった。うれしかった。われは文を作る能はないが、読むのは好きやんな又こうて読むで。名村造船一日行ってけつわった。足場ばらしのかたずけ。乱文やが読んでや。

ちょっと労ム看護世の文の意見云わしてもらう。我々日産やが、そんなにひ下したもんやない。文をよんどると、いかにも我々は人生の底辺に生きてる様に感じる。もっと明るい文をのせたらええ。自分がなんでこないになったか追及せずに。陰気くさい。

今日はあぶれた。つれづれなるままにひぐらしすずりにむかいて、よしなしごとをそこはかとなくかきつづれば、あやしゆうものぐるほしけれ。

にしだへ三八才

☆

正月が早く過ぎてくれないものかと丈思われることだ。仕事が途絶えてしまうからだ。先月末（29日）に飯場より戻りウロウロしていたら、三日間の内で一万円をパチンコでスッてしまうし、しょもない女に買わされるし（四千円に値切る）、正月二日現在朝にして、手元には四千円足らずの金しか残っていない。全く正月も何もあったものではない。センターさえ開いておったら飯場に連れていって貰えるのであり、めしにありつけるのだが、正月のお陰でそれも不可能、裏に死だけがひしひしと近づいてくる感じだ。

釜ケ崎野仏者（野仏者なんていう上等な代物に非ずして）が常に死を背負って生きているとはこのことか……。

（正月二日の日記より）

北川　譲（三九才）

☆

俺も西成で日産人夫生活を長年過ごしました。又、飯場生活も転々として、酒もよく呑んだり、又、三角公園で競輪のノミ屋で連番が来るのを待ち、自分の車券もよくはずれましたが、何回かの内に的中する事もありましたが、勝っても呑み食いでもを呑み、飯代ドヤ代もなく、外で野宿もよくしました。

その中で一番忘れる事の出来ない事件がありました。それは古く住みついていた人なら思い出す事でしょう。

昭和三十六年八月一日より暴動が起りました。俺の記録では一週間位い続いた様に思います。

昼間は労務者は仕事に行っていますが、夜になると群衆が西成署通りこと西成署の道路せましとつめかけ、投石する者も何人かいましたが、投石する人は大体きまっていた様に思いました。群衆の中でお前ら投石するなら俺からせず前からせんけ！　の人声が聞こえました。

警察官が猟銃を持って一人の人物をマークして連れ出し、引き抜いて行きました。

大体夜十二時頃迄はてかげんしてくれましたが、十二時過ぎると実力行使で、徹底的に群衆におそいかかりました。其の時俺は逃げ場を失ない、警棒で殴られ、何日か腕が痛くて仕方がありませんでした。

でも働かないと飯が食べられないし、ドヤ代も必要だし、又、煙草代もいるし困った思い出が残っています。

今は家にお世話になっている現在です。

松下義一（神戸）

☆

あっちのめし、こっちの御馳走事をいただく飯場、すなわち宿舎生活をやって来たブー太郎だが、契約満期釈がくれば兎角のようにつかれ切ったバラバラの神経にハイボウを入れ、まとな神経になって来寒夏。

こんな気楽な苦労やメランネで早や定年。どうして生きていったらよかんべ。

丸元武雄（東京）

☆

アルコール　のまずにさえたぶもち　生きてゆけるか　いまのせのさま

ピーナッツも　食わずに悪い酒を呑み　くろいだしたか　冬のアンコ

京遠男（三八才）

☆　☆

十八号の良心的な寺師の話大変参考になりました。どか次回には、悪質な寺師の話もお願いします。

良心的なサム者がだまされて悪い飯場に行かれてさけしないためにも、ぜひお願いします。そして要領な飯場、現金仕事場等をみんなの力で（以下不明）

四田逞男（四五才）

☆　☆

ヨコハマの港の近辺でかいていますが、ぼくたちの苦しみや喜びを許えた本というものはなく、「労務者渡世」のやうな本があるのはたいへんありがたいと思います。その日暮しの仲人たちの日常の生活の記録であり、この本から得るところ、学ぶべきことが多いと思います。

これに似た本で、ぼくがたった一冊、持っているものに「土方渡世」というのがあります。サブタイトルが「山谷人の招待」と山に二枚、手描きの絵がはいってます。（白黒）朝の寝安雑する風景と、ベッドハウスの「カイコダナ」とのびている労務者、実に実感がこもっていてなつかしいものです。

ひと頃は、ハマの港も不景気で、閑古鳥どころか、オケラも鳴かないほどのさみしさ。近頃はどうやら底をつきました。

成島（横浜）

☆

たずね人

兄は四十七才、但馬、故郷を出たのは、もう十年ぢたります。背は百六十二、三センチ、結婚をいやらい、色は白く、まゆもは割に薄く、鼻はこけています。目は一重で、神経質に目をパチ〳〵するくせがあり、文学青年の作品は果田銀之介のペンネームをつかってました。

兄は文学のために、体制化された社会から脱退していったとも云える訳ですので、私対、そちらに赤痛しない訳がないと思います。　大川省子

☆　☆

（係）心あたりのある方は編集委員会まで連絡を下さい。